『秘密曼荼羅十住心論』の研究（1）
―住心品と十住心―

福田亮成

一、十住心という階梯

弘法大師空海（七七四～八三五、以下空海）の思想体系は、その特徴として一貫して自心の本源を追求するための道程についての考察に終始しているといえる。むろん、十住心体系の構築はまさしくそれである。それは、『辨顕密二教論』・『即身成仏義』・『般若心経秘鍵』、そして『吽字義』もしかりである。

さて、私は独自に『空海コレクション3・4』（ちくま学芸文庫）として、『秘密曼荼羅十住心論』上・下を刊行した。それに因んで、これより幾つかのテーマを掲げて『秘密曼荼羅十住心論』のより深く広い理解をうながすことにしたい。

『秘密曼荼羅十住心論』（以下『十住心論』）は、まさしく浄菩提心の進展。空海自身に即して云えば、仏道探求深化の過程をテーマとしていると云うことができよう。

まず、『十住心論』の大綱序の中において、『大日経』巻一、住心品第一から三句の法門の文を引用し、

次のごとくに云う。

また、問すらく、菩提に発趣するの時、心の所在の処の相続の次第に、幾(いくば)く種かある、と、仏、具にこれを答えり。故に『経』の初の品を名づけて住心という。今、この経に依って真言行者の住心の次第を顕わす。顕・密二教の差別をまたこの中に在り。住心は無量なりていえども、且く十綱を挙げてこれに象毛を摂す。

(『定弘大全』二・八)

と。即ち、真言行者が菩提に発趣する時の心の所住の処の相続の住心の次第を説いたので、それは『大日経』巻一、住心品第一にその根拠を定め、無量なる住心を仮に十綱にまとめたことが述べられている。そして、そこに顕・密二教の差別についても、明らかにしたという。『十住心論』は、竪の教判の立場をあかした教判論の一面を持っている、という。

このことは、端に『大日経』をのみ根拠としたというより、強い主体観によって動機づけられてもいる。

空海は二十四歳の時に『聾瞽指帰』を執筆し、後に序文と結論部分を改編して『三教指帰』としたが、その『三教指帰』の序文に次の文がある。

復、一の表甥有り。性則ち俱戻にして、鷹犬酒色晝夜に楽しみとし、博戯遊侠以て常の事とす。其の習性を顧みるに陶染の致す所なり。彼れ此れ両事、日毎に予を起す。所以に亀毛を請うて儒客とし、兎角を要めて主人となす。虚亡士を邀りて入通の旨を張り假名兒を属して出世の趣(おもむき)を示さしむ。

（『定弘大全』七・四二）

と。『三教指帰』の構成は、兎角公を主人とし、一の表甥、即ち兎角公の外甥といわれる蛭牙公子を連れて、儒教を代表する亀毛先生。通教を代表する虚亡隠士、そして仏教を代表する假名乞兒を登場させ、兎角公が蛭牙公子をともない、三人の先生が兎角公の館を訪ずれるということが骨子となっている。

十住心体系に即して考察してみれば、第一異生羝羊心は、蛭牙公子、第二愚童持斎心は、亀毛先生、第三嬰童無畏心は、虚亡隠士、第四唯蘊無我心は、假名乞兒に各々配当されるであろう。よって、十住心体系の第一住心から第四住心までの構想は、すでに『三教指帰』により発想されていたということができよう。そして、第四住心に想定されている假名乞児論の内容はすでに大乗仏教にまで言及されており、やがて第五から第十住心の密教への結果は、假名乞児に仮託された空海の求道の過程であったと云うことができよう。

二、大日経宗の仏教統一説

『大日経疏』巻三に、大日経宗は横に一切仏教を統一するという。それは、次のごとくである。

またこの経宗は、横に一切の仏教を統ぶ。「唯蘊無我の出世間の心は蘊中に住す」と説くがごときは、即ち諸部の中の小乗の三蔵を摂す。「蘊の阿頼耶と観じて自心の本不生を覚る」と説くが如きは、即ち諸経の八識三無性の義を摂す。「極無自性心、十縁生句」と説くが如きは、華厳と般若との種種の不思議の境界を摂して、皆な其の中に入る。「実の如く自心を知るを一切種智と名づく」と説くが如きは、則ち仏性一乗と、如来秘蔵とは、皆其の中に入る。

種種の聖言に於て、其の精要を統べざることなし。若し能く是の心印を持って、広く一切の法門を開くをば、是れを通達三乗と名づく。

また次に真言門に三密の印に乗じて、仏の三平等の地に至るを、名づけて通達三乗とす。浅深の重数は、前に説くが如し。

（『大正』三九・六一二b）

まず、この文を分析してみよう。大日経宗は「一切の仏教を統ぶ」とし、さらに、「種種の聖言に於

て、其の精要を統べざることなし」として、大日経宗は全仏教を横断的に統一していることを指適している。そして

(1)「唯蘊無我の出世間の心は蘊中に住す」――小乗の三蔵。

(2)「蘊の阿頼耶を観察して自心の本不生を覚る」――八識三無性の義。

(3)「極無自性心、十縁生句」――華厳・般若との種種の不思議の境界。

(4)「実の如く自心を知るを一切種智と名づく」――仏性一乗と如来秘蔵とは、皆其の中に入る。

となろう。これら四つのテーマは、「大日経」巻一、住心品第に典拠を有するものであった。それらは、次のようにである。

まず(1)は、いうところの三劫段の第一劫の声聞・縁覚乗にある一文である。

世間の三妄執を超えて出世間心生ず。謂く是の如く唯蘊無我を解し、根と境界とに淹留修行し、業煩悩の株杌と、無明種子の十二因縁を生ずるを抜く。……秘密主、彼の出世間心は蘊の中に住して、是の如くの慧随って生ずことあり。

（『大正』一八・三b）

この文から略出したことが明らかである。ついで(2)は、いうところの三劫段の第二劫の文で、大乗行

にあたる。

秘密主、復次に大乗の行あり。無縁乗の心を発して、法に我性なし。何を以ての改に、彼、往昔の是の如く修行せし者の如く、蘊の阿頼耶を観察して、自性は幻と陽焔と影と響と旋火輪と乾闥婆城の如しと知る。（『大正』一八・三b）

文中の「自性は幻と陽焔と影と響と旋火輪と乾闥婆城の如しと知る」を、自心の本不生を覚る、というようにまとめたにちがいない。

次の(3)であるが、これはいうところの第三劫に相当する。即ち、

謂ゆる空性は、根と境とを離れ、無相・無境界にして諸の戯論を超えたり。等虚空無辺の一切の仏法は此れによって相続して生ず。有為と無為界とを離れ、諸の造作を離れ、眼・耳・鼻・舌・身・意を離れて極無自性心生ず。（『大正』一八・三b）

さらに、あげられている十縁生句のありかは、住心品の構成に随って云うならば、三劫段が終り、十地・六無畏と次第し、その後に次のようにある。

秘密主、若し真言門に菩薩の行を修する諸の菩薩は、深く修して十縁生句を観察し、当に真言行に於て通達し、作証すべし。云何人が十となす。謂く幻と陽焔と夢と影と乾闥婆城と響と水月と浮泡と虚空等と旋火輪との如し。秘密主、彼の真言門に菩薩の行を修する菩薩は、当に是の如く観察すべし。

（『大正』一八・三c）

と。この引用した二つの文章から極無自性心と十縁生句の二句をとって、その主趣を華厳・般若との不思議の境界と述べているが、十住心体系の第九極無自性心を華厳と定める一つの根拠となったのではないか、と考えるものである。

次に(4)であるが、それは住心品の最初に『大日経』の中心課題である三句の発問があり、それに答えて、菩提心を因となし、悲を根本となし、方便を究竟となす、とし、次の文がある。

秘密主、云何が菩提とならば、謂く実の如く自心を知るなり。…

爾の時に金剛手、復佛に白して言さく、誰か一切智を尋求する。誰か菩提の為に正覚を成ずる者ぞ。誰か彼の一切智智を発起すると。佛の言わく、秘密主、自心に菩提と及び一切智智とを尋求すべし。何を以ての故に、本性清浄なるが故に。

（『大正』一八・一c）

これは、住心品の結論ともいうべき文であるが、ここに仏性一乗と如来秘蔵とが入るとしている。

これらによって、経宗は横に一切の仏教を統ぶ、ということが明らかになったであろう。確認してみよう。

(1) 小乗の三蔵

(2) 八識三無性の義

(3) 華厳・般若との種々の不思議の境界

(4) 仏性一乗と如来秘蔵

となるであろう。このような、大きく仏教の展開史を鳥瞰する仕方は、空海の十住心体系の形成に大きな依り所となったにちがいない。さらに次いで

種種の聖言に於て、其の精要を統べざることなし。若し能く是の心印を持って、広く一切の法門を開くをば、是れを通達三乗と名づく。

また次に真言門に三密の印に乗じて、仏の三平等の地に至るを、名づけて通達三乗とす。浅深の重数は、前に説くが如し。

この二つの文は、共に通達三乗と云っている。しかし、

①心印を持って広く一切の法門を開く

②真言門に三密の印に乗じて、仏の三平等の地に至る

とあり明らかに、初の通達三乗と後の通達三乗との意味するところは相違している。②の通達三乗は、密教の意味である。①の通達三乗は、一切の法門を開く、という点で、空海の視点からは顕教のそれであろう。即ち、開くから至る、という点で密教の本質を示唆しているかにみえるのである。

三、仮名乞児の仏教観

まず、『三教指帰』の構造から十住心体系の第一から第四住心までの具体的な様相が明らかになり、『大日経疏』巻三からの、「この経宗は、横に一切の仏教を統ぶ」の文から大乗より密教の様相が明かされた。この見解は、『大日経』を翻訳し、『大日経疏』によって解説した善無畏（六三七～七三五）と、一行（六八三～七二七）の中国仏教よりインドの仏教世界を見はるかす視座であったろう。それは、日本仏教の土壌に生きながら、中国仏教、そしてインド仏教を視野におさめた空海にとって、まったく頷くことであったにちがいない。

空海においては、すでに十住心体系構想は、発芽していたと考えるものである。

ここで、どうしても空海の仏教参入の事情をふりかえっておきたい。そして、それは、厳しい修行が

入口であった。

爰に一の沙門有りて、余に虚空蔵の聞持の法を呈す。其の経に説かく、「若し人、法に依て此の真言一百万遍を誦すれば、即ち一切の教法の文義暗記することを得といえり」。ここに大聖の誠言を信じて飛焔を鑽燧に望む。阿國の大瀧の嶽に躋り攀ち、土州の室戸の崎に勤念す、谷響を惜まず、明星來影す。遂に乃ち朝市の榮華をば念々に之を厭い、巖藪の煙霞をば日夕に之を飢る。

（『定弘大全』七・四一）

ここには、仏教との出合いと、山野に修行の場を求め、やがて「谷響を惜まず、明星來影す」という体験を得て世間心をこえていった空海の回心の様子が明らかである。では、空海自身を投影したと思はれる仮名乞児にどのような仏教が説かれることになるのであろうか。それが十住心における第四住心からの仏教探究の端緒となっているからである。

まず、仮名乞児という修行者の外見、風采が描写され、修行地と仲間達、そして修行生活のありさまが活写されている。そして、ある人の言葉に

我れ師に聞く、天地の尤霊（ゆうれい）、寔に人其れ首たり。惟れ人の勝たる行は、惟れ孝なり、惟れ忠なり。

餘の行萬差なれども、此の二は其れ要なり　（『定弘大全』七・六五）

と述べ、その実際を具体的に述べ、假名乞児は、「何をか忠孝と謂う」と問い、忠孝ということの内容を問うことになる。

親を安んじ主を匡する。是の如くの類を忠とし、孝とす。伏して命の旨を承まわぬ、寔実に余れ不肖なりと雖も、然も猶頗る禽獣に異なり　（『定弘大全』七・六六）

と忠孝の道理は充分にわきまえているが、

居諸矢の如し、彼の短き壽を迫む。家産澆て醨いて墻屋傾なむとす。二の兄重に逝いて数行汍瀾つらなり。九族俱に匱なりて一心潺湲こころほそし。慷慨之思を起し日を以て月に継き、悽愴之痛を興し旦より夕に達る。　（『定弘大全』七・六七）

と反省し、私には孝といい、忠といい、その行為をするのにはまったく力がなく、ただ、

進まんと欲すれば才無し　退ぞかんとするに逼有り　進退の両の間に　なんぞ歎息夥き。

（『定弘大全』七・六七）

と歎いて、「小孝は力を用いる、大孝は匱からず」とし、小孝は筋力の範囲ではないのかと批判し、

余、愚陋なりと雖も、雅訓を斟酌し、遺風を鑽仰す。毎に國家の為に先づ冥福を廻らす。二親一切には悉くに陰功を譲る。此の慧福を捻べ忠とし、孝とす。

（『定弘大全』七・六八）

と反論した。そして、亀毛先生と虚亡隠士にむかって、

汝等、未だ覚王之教、法帝の道を聞かす。吾、当に汝等がために略網目を述ふ。

（『定弘大全』七・七一）

と、いよ〳〵仮名乞児の仏教が述べられようとしている。

まず、「無常の賦」と、「受報の詞」が説かれる。無常の有様を、須弥山も大海も劫火によって灰滅し消え尽していくものであり、広大なる土地も摧け裂けて天空も焼け砕けてしまうものである。よつて深

い禅定に入って長寿を得る修行者も、心の広い長命なる仙人も、雹の撃つほどの短い生命もはかない存在である。ましてや、

況んや吾等體を稟こと金剛に非ず。形を招ること瓦礫に等し、五蘊の虚妄なること水の菟の偽り借るに均し。四大の逗まり難きこと野の馬る倏迹に過ぎたり。

（『定弘大全』七・七四）

と。このような現実を見て、心が乱れ、四苦・八苦が常に心源を悩まし、三毒が恒に燃えさかり、百八の煩悩はたえずおこってくる。特に心を悩ます女性の姿態の数々をあげる。脆き体・假の命・千金の瑤・万葉の宝姿・婕娟たる蛾眉・的皪たる貝歯・傾城の華の眼・珠を垂れたる麗耳・朱を施せる紅の瞼・丹に染めたる赤き唇・百の媚つ巧たる笑・千の嬌の妙なる態・峨峨たる漆き髪・纖纖たる素き手・馥馥たる蘭気・涓涓たる臭液等と女性観察に祥細を極めている。これは、空海の実際の女性観察というより中国文学において述べられている女性抽写のうつしでもあろうか。よって、女性も宝蔵も夢の中で遇ったり、そして空しくなってしまう現実を、

颼飀たる松風の飈飈とかすかにして襟を吹くとも、聆き忻の耳、更に何れの所にか在る。玲瓏とさやかなる桂月の憐れむべくして面を暎すときに視し娯むの心、亦た何れの處にか之し。

（『定弘大全』七・七六）

やがて訪れる死をどうして逃れることができようか、と詠嘆し、地獄の苦のありさまが活写されることになる。

一は則ち懼（おそれ）を懐（いだ）いて魂を失ひ、一は則ち哀を含んで悶絶しぬ。假名則ち瓶（つるべ）を採って、水を呪し普く面の上に灑く。

（『定弘大全』七・七八）

假名乞児のこの行為をもってことさらに密教とのかかわりを指適する必要はないであろう。修行者空海が行者として自然に行ったものと考えておくべきであろう。しばらくして蘇生した亀毛等は、重ねての説法を懇請する。

そして説かれたのが「生死海の賦」である。生死海とは人びとが生きる俗世界のことである。そこに生きる人びとの心に跋扈する煩悩を鱗類・羽族・雑類（禽獣類）に分け、各々をあげる。

鱗類とは、慳貪・瞋恚・極癡・大欲。

羽族とは、諂誑（へつらい）・讒諛（ざんゆ）（そしる）・誹謗（ひぼう）・麁悪（あらい言葉）・噂沓（たんとう）（うわさ）・嚾奴（かんど）（やかましい）・遽除（きょじょ）（へつらい）・悪作（おさ）（あくじ）。

雑類とは、憍慢（あなどり）・忿怒（いかり）・罵詈（ののしり）・嫉妬・自讃・毀他・遊蕩・無慚・無愧・不信・不恤（つめたい）・邪淫・邪見・憎愛・寵辱（はずかしめ）・殺害の党・闘閲の族をあげている。鱗類のそれは、自心に巣くう根本的な煩悩である。羽族のそれは、他者に対しての迷惑行為である。雑類のそれは、対社会的な悪行為であろう。

このような脅かしによって

茲に因って五戒之小舟、猛き浪に溂よわされて以て羅刹の津に曳々掣々たり。十善之椎輪、強き邪に引かれて魔鬼の隣に隠々軫々なり。（『定弘大全』七・八二）

と。よって、この状況からの脱出は、〝発菩提心によって、最勝の果報を仰ぎみる〟というよりない。即ち、六度の筏（六波羅密）・八正之航（八正道）・七覚の馬（七覚支）・四念の輪（四念処観）等をもって速かに生死の迷いをとりさることである。その可能なことは、『法華経』に説かれる喩のごとくでありとし、

則ち頂の珠を許して以て壇に封せらしむこと。彼の鵞子が授記之春に同じく。頸の嚶を奉げて以て境を盡こと、此の龍女か得果之秋に比はむ。（『定弘大全』七・八二）

これらは、鶖子が授記之春とは、『法華経』巻二、譬喩品（『大正』九・一一七）。龍女が得果之秋とは、『法華経』巻四、提婆達多品（『大正』九・三五七）にある喩で、共に成仏が約束されていることで、十地の長い路を、三祇の遥かな劫をこえてさとりを完成させることができると云う。それを、

生滅を超えて改めず、増減を越えて衰えず。萬劫を踰えて圓寂なり。三際を亘（わたつ）て無為ならん。

（『定弘大全』七・八三）

と。しかし、四弘誓願の完成をみる以前に人びとが地獄に沈んでいる現状を鑑みて、

爰に更に百億の応化を百億の城（みやこ）に班（あか）ち、非相に假託（かりつ）けて非形を示現す。（『定弘大全』七・八三）

と。

これまでの考察は、いったいどれだけの仏教が説かれているかを確認することにあった。そこには当然のこと、修行をいうものを先行させながら仏教にかかわりを持つことになった空海の独自な視点が見てとれよう。即ち南都六宗の教学研究の成果でなく、強い無常観に裏打ちされた仏教の基本的な実践原理に基づくものであったといえよう。即ち、六波羅蜜・八正道・七覚支・四念処観等である。そして、

さらに四弘誓願が完成をみる前に、人びとが地獄に沈んでいく現状から応化仏の誓願を仰ぎみるのである。

ここに、声聞・縁覚、そして菩薩の登場を求め、大乗の代表たる『法華経』をも視野に入れていることは注意を要するものである。

假名乞児論の構造は、『十住心論』第一異生羝羊心にまったく重なる。異生羝羊心とは、空海においては假名乞児論が前提となっているかに考えられる。

四、蛭牙公子と異生羝羊心

『三教指帰』の序文に登場する〝一の表甥〟のありさまは、

復に一の表甥有り。性則ち佷戻にして、鷹犬酒色晝夜に楽とし、博戯遊侠を以て常の事とす。其の習性を顧みるに陶染の致す所なり。

（『定弘大全』七・四二）

さらに本文の亀毛先生論においては、

兎角公之外甥に蛭牙公子というもの有り。其の人となり、狼の心佷戾にして教誘に纏れず、虎の性さま暴悪にして礼義に羈れず、博戯を業とし、鷹犬を事とす。遊侠に頼げ無く、奢慢のおこりは餘有り。因果をも信ぜず。罪福をも諾はず。酔うまでに飲み、飽まで喰うて、色に嗜なみ寝に沈めり。親戚病有れども曾て愁る心無し、疎人相對へども敬んで接る志し莫し。父兄を狎れ侮つり、耆宿を侈り凌ぐ。

（『定弘大全』七・四三）

とある。序文の〝一の表甥〟とは、まさしく兎角公の外甥である蛭牙公子に重なり。同一人物の描写であろう。

さて、『十住心論』巻一を異生羝羊心としたのは、

浄心最初の生起の由を明さんと欲うが故に、先づ愚童凡夫の違理之心を説きたまへり。

（『定弘大全』二・一〇）

と云っているが、これは『三教指帰』の序文の〝一の表甥〟の存在と呼応している。さらに異生羝羊心の実際について、『十住心論』巻一の異生羝羊心の説明をおってみよう。

異生羝羊心とは、此れ則ち凡夫の善悪を知らざるの迷心、愚者の因果を信ぜざる之妄執なり。……火宅の八苦を覚らず、寧ろ罪報の三途を信ぜんや。遂に乃ち滋味を水陸に嗜み、華色を乾坤に耽る。鷹を放ち犬を催して、填腹之禽命を断ち、馬を走らせ弓を彎きて、快舌之獣身を殺す。澤を涸らして鱗族を竭し、薮を傾けて羽毛を斃す。合圍を以て樂とし、多獲を以て功とし、解網之仁を顧みず、豈に泣辜之悲を行ぜんや。荒婬度ること無くして、晝夜に樂むこと只はだし。或は他の財物を抄掠し、人の妻妾を姧犯す。四種の口過と三種の心非は、人法を誹謗し、闡提を播植す。時として作さざること無く、日として行せざること無し、忠ならず、孝ならず、義も無く、慈も無し。

（『定弘大全』二・九）

ここでは、異生羝羊心なる心の持主の分析を通して、多く蛭牙公子のそれと共通していることが確認されればよい。

さらに加えて、

五常も羅網すること能わず、三乗も牢龍することを得ず、邪師に祖として習い、邪教に依り憑る。曾つて出要を求めず、一向に眼前を營む。是の如くの象生を名づけて愚童羝羊と曰うなり。

（『定弘大全』二・九）

と。愚童羝羊の如き心の持主を定義している。次いで、『大日経』からの愚童凡夫の典拠を、その本文を含めて『大日経疏』巻一、住心品第一の、凡夫の我執についての解説である。それが『十住心論』に引用されているが、それらが少しづつ相違しているので、念のため上・下に掲げてみることにしよう。

『大日経疏』

『経』に

秘密主、無始生死の愚童凡夫は、我名と我有とに執著して、無量の我分を分別す、秘密主、若し彼れ我の自性を観ぜざれは、則ち我と我所とを生す。

と云うは、

以下は心相續の義を答う。浄心の最初の生起の由を明かさんと欲うが故に、先づ愚童凡夫の違理の心を説きたまへり。

無始生死とは、『智度』に云く、世間の若しは衆

『十住心論』に引用文

故に大日世尊、秘密主に告げて曰く

秘密主、無始生死の愚童凡夫は、我名と我有とに執著して、無量の我分を分別す。若し彼れ我の自性を観ぜざれは、我と我所とを生ず。

又云く、秘密主、愚童凡夫の類は猶し羝羊の如し。

注すらく、善無畏三蔵釈して云く。此れ從り已下の十種の住心は、佛、心相續之義を答う。浄心最初の生起之由を明かさんと欲うが故に、先づ愚童凡夫の違理之心を説きたまへり。

無始生死とは、『智度論』に云く、世間の若しは

生、若しは法、皆始あることなし。『経』の中に、佛の言く、無明に覆われ、愛に繋がれて、生死に往來すること始め不可得なり。乃至、菩薩は無始も亦た空なりと観じて、有始見の中に堕せず。

愚童の義は前に説くが如し

凡夫とは、正譯には異生と云うべし。謂く無明に由るが故に、業に随うて報を受けて自在を得ず。種種の趣の中に堕して、色心像類各各差別なり。故に異生と曰う。其の所計の我は、但し語言のみ有って而も実事なし、故に執著我名と云う。我有と言うは、即ち是れ我所なり。是の如くの我我所執の十六知見等の如し。事に随って差別無量にして、不同なるが故に名づけて分とす。

（『大正』三九・五九一c）

衆生、若しは法、皆始あることなし。『経』の中に、佛の言く、無明に覆われ、愛に繋がれて生死に往來すること始め不可得なり。乃至、菩薩は無始も空なりと観じて、而も有始見の中に堕せずといへり。

愚童とは、具には愚童薩埵と云う、謂く六道の凡夫は実諦の因果を知らずして心に邪通を行し、苦因を修習し、三界に戀著す。堅執して捨てず、故に以て名とす。

凡夫とは、正譯には異生と云うべし。謂く無明に由るが故に、業に随うて報を受けて自在を得ず。種種の趣の中に堕して、色心像類各各差別なり。故に異生と曰う。其の所計の我は、但し語言のみ有って而も実事無し、故に執著我名と云う。我有と言うは、即ち是れ我所なり。是の如くの我我所執の十六知見等の如し。事の差別に随って無量に不同なり。故に名づけて分とす。

（『定弘大全』二・一〇）

以上、『大日経』にいう、愚童・凡夫観を自己のそれに同化していることは重要であろう。

五、まとめ

空海の最初の著作である『三教指帰』は、後に十住心体系の第一住心と、その後の住心の展開に基礎を提供している。特に〝一の表甥〟として紹介された存在は、第一愚童羝羊心の中核を形成している。さらに引用した『大日経疏』の一文は、仏教全体を鳥瞰したものでありもう一つの通達三乗、即ち真言門に三密の印に乗じて、仏の三平等の地に至るという密教の見解を手入し、『三教指帰』の全体と、そして假名乞児論をもって、十住心体系の素地をすでに入唐の頃には思考していたのではないかと考えるものである。

〈キーワード〉十住心、假名乞児、愚童凡夫、三教指帰